

第4章

全体討論-2

4.1 リスクの定量化をめぐる

柴崎 リスクは定量化できるかどうかという問いがありましたが、定量化はできないとお考えなんですか？

吉川 定量化はできるかもしれないし、理想としてはそうかもしれないけれど、リスクが定量化できることをもって、社会に受け入れられるべきだと考えるのはおかしい、ということです。

柴崎 僕は、半分哲学が専門で、半分情報科学が専門なんですが、情報科学から言うと、シャノンの情報エントロピーという理論があって、リスクもリスク情報として考えると、リスクが起こりうる度合いを統計的に考えることによって度合いが測れますよね。その度合いが高ければエントロピーが低く、低ければエントロピーが高い。また、それを式として掲げることができる。つまりシャノンの立場に立つと、リスクを情報と考えれば定量化できるんですね。しかしそれがリスク・コ

コミュニケーションがさらに増進したり、円滑に行われるために、どの程度貢献できるかと言えば、何も貢献しないのではないかとも思いました。

津田 リスクが定量化できるかどうかということですが、リスクの定義が問題になってきますね。リスクを被害（ハザード）×確率とおっしゃいましたが、疫学の世界では、ある一定の観察期間における被害の生起確率をリスクと呼んでいます。法学、数理統計学、疫学においては、ハザードとは、瞬間確率を表しています。また被害の重大性については、疫学や医療経済学ではコストで考えます。このようにして全部計算できます。先に述べられたリスクの定義は、個人的なお考えでしょうか、それとも心理学の定義でしょうか。

吉川 リスクについてもリスク・コミュニティがあるので、先に申し上げたリスクの定義は心理学者だけではなく、リスク学会の定義です。ナショナル・リサーチ・カウンシルでも適用されています。

津田 いずれにしても、リスクをどう定義しても計算可能ということですね。

吉川 はい、計算可能です。

津田 それから「リスクを回避する」という言葉がありますね。リスクの増加分とリスクの絶対量を混同されておられるのではないのでしょうか。たとえば、原発の周辺に住んでいると白血病が増加するのではないかという問題をめぐって、反対派はリスクが増加すると考えます。しかしもともと個人が白血病にかかるかもしれないベースラインのリスクと、原発が建設されることによって増加するリスクを区別して考えないと、議論が分かりにくくなると思います。

吉川 ちょっと、その意見の趣旨が分からないのですが……。

津田 もともと白血病にかかるリスクを R_0 とし、原発が近くに建設されることにより増加するリスクを R_1 とすると、 R_0 と R_{1-0} を混同してしゃべっておられるのではないかと思いました。これはけっこう重要な問題です。

吉川 混同しているかどうか分かりませんが、混同していると、どういう問題があるのですか？

津田 リスクの増加分の話をしているのに、その知識がないと、原因を除去したことによってリスクをどの程度下げたかという議論ができないわけです。

吉川 混同していても、それは変わらないと思います……。

4.2 リスクの専門家と素人の関係

平田 リスクの専門家という言葉がよく使われますが、それに関連してお伺いします。専門家と学生でリスクに対する認識が違うということですが、この場合の専門家とはどういう人達ですか？

吉川 これは実験データですので、リスク学会のメンバーです。

平田 私の見るところ、学生の方がまともな反応をしています。専門家はだいたいあてにならないというのが、常識的な判断でしょう。あてにならないというのは、ある限られた狭い領域では専門性が高いけれども、それらが及ぼす悪影響などについて知らないことが多い。また

ちょっと専門が違えば、もう学生と違わないレベルの知識しかない。だから専門家という場合、どういう専門家なのかを明確にしないとまずいと思います。

それから情報についても似た話ですが、情報が増えればいいかと言えば、そうとも言い切れません。これはよく神沼先生が指摘されていることですが、たとえば東京で大地震が発生する可能性はありますが、その情報を流すことにより、大パニックが起こりうるわけです。信頼できる情報や質の良い情報をどう増やすか、特に専門知識のない普通の人々がどう判断できるかがキーポイントだと思います。むしろ、わけの分からない情報が氾濫しているのが現在ではないかと思いますが。

吉川 たぶん、それは心理学者の考え方が違うんだと思います。つまり、心理学者は、そんなに人間をあてにしていない。定量化や情報の質にもかかわってきますが、情報が正確かどうかは、ある意味ではあまり問題になりません。人間はいくらでもまちがうわけです。いくらリスク評価の精度を上げても、あるいはたくさんのサンプルをとったとしても、合理的な判断ができるとは限らないという前提に立っています。

林 それはエビデンスの質に関わる重要な問題ではないかと思います。なお、余談ですが、地震に関する情報についていえば、むしろ、パニックがおこることなどほとんどなく、肝心な情報が流れても、それほど真剣に受け止められていないこと、つまり影響力が小さいことのほうが現実には問題なのだと考えています。情報の正しさだけでは、人々を動かすことはむずかしことの実例だと思います。

4.3 リスク情報を社会全体で共有する意味

横川 初歩的な質問かもしれませんが、リスク・コミュニケーションについて古い考え方と現在の捉え方を説明され、リスク情報を社会全体で共有するという指摘をされましたが、そのイメージがちょっと分からない感じがします。また、意思決定には時間がかかるとされていますが、それらのプロセスはどこで決めていくのでしょうか。

吉川 それは難しいですね。なぜ難しいかと言えば、他の人文科学と違って、心理学は、どうあるべきかという価値を扱わないからなんです。政策も含めて、誰が決めるべきかという問題は、心理学者は自分たちの守備範囲ではないと思っています。今日の私の話も、あくまでも考え方であり、こうあるべきとか、このように意思決定すべきだ、というものではないのです。

これはある意味では、ダブルスタンダードですが、心理学者として率直に言えば、理想としては科学的根拠に基づいて意思決定をして合意形成ができればいいけれど、そうはいかないだろうと思っています。もちろん理想としてはそうあるべきですが、現実はそうではないと感じているわけです。

平川 科学的ベースをしっかりとさせることは、リスク・コミュニケーションにとっても重要なんですね。たとえば遺伝子組み替え作物や環境問題などの例でも、科学的知見をもとにアセスメントする場合、実際に審議する審議会の委員などにまず情報を公開し、科学的ベースをしっかりとさせることは、リスク・コミュニケーションの上でも重要なわけですね。

吉川 ナショナル・リサーチ・カウンシルでは、リスク・コミュニケーションという呼び方をやめて、むしろリスク・デリバレーションとい呼び方をとろうとしています。コミュニケーションという言葉には、どうしても説得的なニュアンスがあるからだと思います。一方、最近、科学アカデミーに人文系の科学者がたくさん入ってきているので、理科系の逆襲という面もあるのではないかと思います。

平川 同時にヨーロッパでは、2001年の報告書では、Democratizing Expertises というかたちで、両者をバランスさせる方向をめざしています。その中で、コミュニケーションやデリバレーションの代わりに、ガバナンスという言い方もしています。

吉川 アメリカ人は科学的なリスク管理を重視しているので、ヨーロッパとは違う考え方をしていますね。

4.4 リスク回避のための共通プラットフォームは可能か

高岩 なんとなくもやもやとしていたのは、リスクとは何だろうか、ということ。それぞれの文化的土壌をベースに、リスクと思われるものを発見し、それを評価していくわけですが、考えようによっては、すべて幻影であるかもしれないわけですね。先ほど、社会的論争の場合は説得しないという指摘がありましたが、そうすると、リスク・コミュニケーションは技術的な問題になるのか、それとも……

吉川 何のためにリスク・コミュニケーションをするのかは、非常に難しいですね。できれば社会全体として少しでもリスク回避できるようにな

ればいいと思いますが、そうはならないかもしれない。何がリスクかというのは、それをどう定義しようと、すでにそこに価値が入らざるをえない。リスク・コミュニケーションをしても、リスクは削減できないかもしれません。できるにこしたとはありませんが。

松原 今日のようなリスク・コミュニケーションの考え方は、非常に個別具体的な事例研究の上に成り立っているのか、それとも、独自に生まれた理念的な考え方なのでしょうか。もう1つ、リスクの定義についてですが、リスクを家庭でも国家でも予算と考えた場合、その利用配分として、たとえば、家庭生活の収入を全部賭け事に注ぎこむ考え方もあり、また住宅ローンを考えて貯金に回し残りで生活する考え方もあるでしょう。国家予算にしても、リスクを伴う審議プロセスと理解することもできます。国会審議をリスク・コミュニケーションと見たときに、原発、自動車事故、産業政策などにいくらコストをかければ良いのかを考えるきっかけになりうるのかどうか、お聞きしたいと思いますが。

吉川 最初の質問ですが、リスク・コミュニケーションは、コミュニケーションの技術としては特に新しいものではありません。たぶん心理学者の多くは、リスク・コミュニケーションという言葉を知り、何が新しいかよく理解できなかったと思います。実証的な研究に基づいているというより、社会的ニーズに応えるために生まれてきたものだと思います。

2番目のお金に関わる点については、それをリスク・コミュニケーションの対象とする研究者もいますが、私は、お金という要因を入れないほうが、リスク・コミュニケーションの流れがよく分かると思うので取り上げていません。

津田 共通の定量的な叩き台を作らないで、相手の言うことは幻想だとら

えると、議論が堂々巡りになってしまうのではないのでしょうか。もう1つ、私は、社会全体のリスク回避は実際はかなり成功していると思います。その先端的な例は喫煙で、喫煙のリスク回避により、イギリスでは肺ガン死亡率が半減しています。それはイギリスできちんと喫煙のリスクに対する認識ができて、共通の議論の場が形成され、早くから対策をとることができたからでしょう。分からない、分からないと言ってしまえば、何も対策が進まず、その結果、日本のように、喫煙による死亡者数が、自動車事故と自殺の合計よりはるかに多いリスクが放置される現状を招いていると思います。

吉川 リスク・コミュニケーションの考え方を紹介すると、よく聞かれるのは、コミュニケーションができない相手にはどうしたらいいのでしょうか、ということです。共通の知識や理解がないからできないということが、その理由のようです。しかし、リスク・コミュニケーションは、できるかできないかではなく、するかしないか、なんですね。

津田 コミュニケーションするとしたら、共通言語が必要ではないですか。

吉川 それはもちろんあるのが理想ですが、そうはいかないかもしれない。

若林 全員参加の意思決定についてですが、特に日本企業の場合、全員参加型の意思決定システムをとりますよね。「必ずしもそれが良い決定ではないかもしれない」という指摘がありました。それを前提としながら、より良い決定をしてくためには、どういう点に注意すべきか、どういう知恵を出していくべきかが課題になると思います。ヨーロッパはガバナンスという発想で、アメリカは科学的管理という発想とのことですが、日本ではどちらの方向が好ましいと思われるか、個人的なお考えで結構ですので、お聞かせください。

吉川 話し合うことについては、それほど楽観的ではありません。また実際問題、人々は日常生活で忙しいので、リスク問題についてそれほど真剣に話し合うことは考えられません。心理学者はリスク・コミュニケーションにはあまり熱心ではなく、教育のほうに心理学の出番があると考えています。